

海外研修レポート

SAHM (Society for Adolescent Health and Medicine) 2018 Annual Meeting に参加して

神藤隆志¹⁾

■はじめに

2018年3月14日～17日にアメリカ・シアトルで開催された青年期健康医学会 (Society for Adolescent Health and Medicine; SAHM) に参加し、研究成果を発表した。本レポートでは学会参加によって得られた成果等について報告する。

■大会概要

SAHM 2018 Annual Meeting は、「Journal of Adolescent Health」を発行する学術団体が開催する年次集会である。会場は、シアトル・タコマ空港から電車で約40分のシアトル市街地にある The Westin Seattle で、大会事務局によると、学会の参加者数は1000名程度であり、口頭およびポスター発表の演題数は合わせて278題であった。今大会ではスマートフォンのイベントアプリ「Whova」が導入されており、参加者は各セッションの概要の閲覧や、興味のあるセッションを保存して自身の学会参加スケジュールを作成するといった機能を利用できた。また、アプリ上で参加者同士のメッセージのやり取りも可能であり、コミュニケーションの促進につながっていた。

■大会のテーマ

1968年に発足した SAHM は今大会で50周年を迎えた。大会のテーマは「Global Adolescent Health Equity」であった。世界各国から多職種かつ幅広い領域の専門家が集まり、青年期の子どもや若者



学会会場 (The Westin Seattle)



会場入り口

1) 公益財団法人 明治安田厚生事業団体力医学研究所 Physical Fitness Research Institute, Meiji Yasuda Life Foundation of Health and Welfare, Tokyo, Japan.

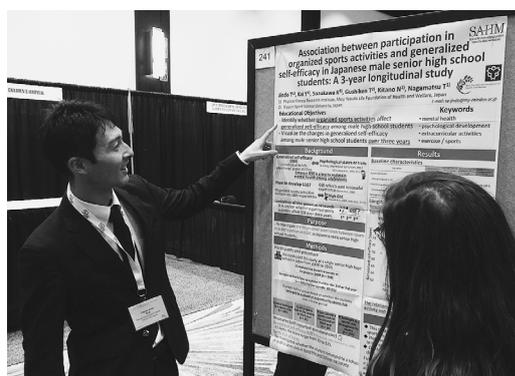
が平等に健康的かつ生産的、そして意義深い人生を送るための解決策について意見交換を行った。

■研究発表

発表は大会第3日目のポスターセッションⅡに割り当てられた。演題名は「Association between participation in organized sports activities and generalized self-efficacy in Japanese male senior high school students: a 3-year longitudinal study」であり、高校生における運動部やスポーツクラブなどの組織的なスポーツ活動への参加と心理的発達（自己効力感）の関係を3年間の縦断研究により検討した。その結果、スポーツクラブに所属している者は所属していない者と比べて1年生時点で自己効力感が高かったが、スポーツクラブ所属者の自己効力感が2年生、3年生で向上する様子はみられなかった。これを踏まえて、心理的発達に有効なスポーツ活動の行い方や、より多くの生徒が参加できるスポーツ活動の展開の仕方などについて意見交換を行った。



基調講演



発表の様子

■おわりに

今大会への参加を通して、青年期における健康課題は社会的・文化的要因の影響を強く受けるため、各国で大きく異なることを改めて認識した。運動やスポーツがそれらの健康課題の改善に果たす役割は大きいと考えられることから、より多くの青少年が運動・スポーツに親しむことができる環境づくりに向けて、引き続き成果発信に取り組んでいきたいと思う。

なお、次回の SAHM 2019 Annual Meeting は 2019 年 3 月 6 日～9 日、ワシントン DC にて開催予定である。



次回大会の告知